

בְּרֵאשִׁית



創世記 2 章

6 節 - 7 節

ベレーシート
בְּרֵאשִׁית 創世記

神である【主】は、
その大地のちりで人を形造り、
その鼻にいのちの息を吹き込まれた。
それで人は生きるものとなった。

(創世記 2 章 7 節)

なぜ土ではなく、「ちり」なのか。

「ちり」の本質が解き明かされます。



この学びは「新改訳 2017」を基本としています。

本日のテキストは、創世記 2 章 6-7 節です。

創世記 2 章 6 節

ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

「しかし水が地下から湧き上がり地の面をすべて潤した。

（聖書協会共同訳）」

神は、天からの雨をまだ地に降らせていませんでしたが、6 節では、地から湧き上がる水が大地（土の全面）を潤しているとあります。

この時点では、まだ地と天はつながっていません。

創世記 1 章 2 節「水の上に神の霊が羽ばたいている（ホバリング）」とあり、神の霊と、神のことばである水がミングリングして

いない状況を感じさせます。水は、この地から湧き上がっていますが、

まだ天とつながっていません。では、

地から湧き上がることを原文から見てみたいと思います。

וַיִּצְלַח מִן־הָאָרֶץ

וַהֲשִׁקָה אֶת־כָּל־פְּנֵי־הָאֲדָמָה

接続詞で文節が始まるので、6 節は二つの文節からなっています。

ハーアーレツ ミン ヤアレ エード
מִן-הָאָרֶץ יַעֲלֶה אֵד
その地 ~から 水
「登る、上る、献げる」

その地から

水が湧き上がっていったということです。

ハーアダマー ・ ペネー ・ コル ・ エツト ヒシュカー
הַשְׁקָה אֶת-כָּל-פְּנֵי-הָאֲדָמָה
「大地の表面のすべて」 「潤す」

面白いことに、四つの言葉 ^{ハーアダマー ・ ペネー ・ コル ・ エツト} אֶת-כָּל-פְּנֵי-הָאֲדָמָה が

ハイフンのような ^{マツケール} מִקְּל (棒) でつながっていて、一つで扱ってい

ます。 ^{ハーアダマー ・ ペネー ・ コル ・ エツト} אֶת-כָּל-פְּנֵי-הָאֲדָמָה を潤していました。

^{エード} אֵד は、この箇所とヨブ記 36 章 27 節の 2 回だけの登場です。

ヨブ記 36 章 27 節

神は水のしずく ^{エード} אֵד を引き上げ それが雨 ^{マータール} מָטָר を滴らせて水の
流れとなる。

27 節では、^{エード} **אֵד** と ^{マータール} **מַטָּר** の間には密接な関りが記されています。

^{エード} **אֵד** が地を代表し、^{マータール} **מַטָּר** 雨が天を代表して、

地と天が繋がることを表現しています。しかし、

創世記 2 章 6 節の ^{エード} **אֵד** は、地からは上がっているけれど、
天とつながっていません。

^{エード} **אֵד** の訳語として

口語訳、70 人訳聖書：「泉」

新改訳改訂第三版、新共同訳、聖書協会共同訳、フランシスコ会訳：

「水」 岩波訳：「地下水」 新改訳 2017：「豊かな水」

他：「水蒸気」「霧」 いろいろな訳を調べてみると「霊的な水」ある

いは「神のことば」を表していると思います。

地から湧き上がる水、地から ^{アーラー} **אֵלָא** される（湧き上がる）水が

大地の全面を潤すほどであったと推察できます。

地からは水である「神のことば」が湧き上がっていますが、

天からの雨（聖霊）と繋がらないことを示しています。

聖霊と繋がらないということは、創世記 1 章 2 節同様、

神の霊がホバリングした状態で水とミングリングしていない情景を表しているのかもしれませんが。沢山の水が地から湧き上がっているのに・・・。そのようなイメージです。

創世記を学ぶとき、目に見える情景で考えると的を外すことが多くあります。創世記 1 章もそうです。昼と夜は、私たちの目する昼と夜ではありません。昼とは、神の栄光が現されるとき、夜は神の栄光が現わされないときという、意味合いが聖書の中に隠されています。

このような聖書的比喻を身につける必要があります。

6 節で、「大地の全面を潤していた」のですが、

天の雨は降らないので地と天は一つに結ばれていません。

つまり、7 節で人が形造られ、「いのちの息」が含まれない限り

地と天が結び合わないのです。「いのちの息」は、神の霊です。

ですから、「その人」が造られることで地と天が繋がってきます。

前回では、灌木や草がないのは、

まだ人が造られていないからだということでした。

この情景は、創世記 1 章 2 節「地は茫漠として何もなく闇が大水の

面の上であり、神の霊がその水の上を動いていた」とあるように

神が地になさることを待ち構えている状態です。そして

2 章 7 節で、

神の「いのちの息」が人に吹き込まれると地と天はつながります。

つまり神と人がつながるのです。

これは後にイエシュアが来ることで理解できる預言的な事柄です。

イエシュアは言いました。

「・・・わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。」(ヨハネ 4 : 14)

「その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

(ヨハネ 7 : 38)

イエシュアが与える水は、人の霊の中で水源となって湧きだし

永遠のいのちへ至らせると語られていました。

そしてそのことばは、復活の日の夕べに成就します。

このように、地と天が神の霊の流れによって、一つになる、
あるいは回復されると啓示されているのです。

創世記 2 章 6 節は、回復される以前の状態で何も始まっていません
が、歴史の流れを予感させます。

「湧き上がる^{アーラー}עֲלָה」

この言葉はとても重要で丁寧に調べる必要があります。

この使役態は、キリストの復活や昇天を表現しています。

I サムエル記 2 章 6 節

【主】は殺し、よみに下し、また引き上げますעֲלָה。

創世記 37 章 28 節

そのとき、ミディアン人の商人たちが通りかかった。それで兄弟たち

はヨセフを穴から引き上げעֲלָה、銀二十枚でヨセフを

イシュマエル人に売った。

創世記 50 章 24—25 節

24 . . . 神は必ずあなたがたを顧みて、あなたがたをこの地から、

アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地へ上らせて **עֲלֶהְךָ** ください。」

25 ・ ・ 「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。そのとき、

あなたがたは私の遺骸をここから携え上って **עֲלֶהְךָ** ください」と
言った。

出エジプト記 3 章 8 節

・ ・ 乳と蜜の流れる地に、 ・ ・ 彼らを携え上げるため **עֲלֶהְךָ** である

エゼキエル書 37 章 12. 13 節

12 ・ ・ あなたがたをその墓から引き上げて **עֲלֶהְךָ**、イスラエルの
地に連れて行く。

13 わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上る

עֲלֶהְךָ とき、あなたがたは、わたしが【主】であることを知る。

ヨナ書 2 章 6 節

・ ・ 滅びの穴から引き上げてくださいました。

ア-ラー
עָלָה (894 回) 「上る、登る、行く、帰る」

使役態では、「上げる、携え上る、導き出す、呼び出す、ささげる、
灯す」で、神（天）への方向性を指し示すことばです。

ア-ラー
オ-ラー
そこから עָלָה (動詞) がノアの祭壇の「全焼のいけにえ עָלָה」
(名詞) となります。

オ-ラー
「全焼のいけにえ עָלָה」をノアが献げることで、いけにえの香りが
神に届いて受け入れられる礼拝の行為となっていきます。

ア-レ
また、いちじくの「葉 עָלָה」(創3：7)

ア-レ
オリーブの「若葉 עָלָה」(創8：11) が派生しています。

ア-ラー
このように「湧き上がる עָלָה」は、神のご計画において、
神様がこれから何かをされる

新たな始まりを予感させる語彙と受け止めていいと思います。

創世記 2 章 7 節

神である【主】はその大地のちりで人を形造り、その鼻に
いのちの息を吹き込まれた。 それで人は生きるものとなった。

ここには接続詞が三つあり、三つの文節に分かれています。

アーファール ハーアーダーム エット エローヒーム アドナイ ヴエイーツェル
עֲפָר אֶת־הָאָדָם וְ יְהוָה אֱלֹהִים יִצָּר
ちりで その人 を 神である主は 形造った

ハーアーダーマー ミン
מִן־הָאֲדָמָה
大地 から

ハツイーム ニシュマツト ベアツパーヴ ヴァイツパハ
חַיִּים נְשָׁמַת בְּאֶפְיוֹ יִפָּחַ
いのちの 息を その鼻に 吹き込まれた

ハツヤー レネフェシユ ハーアーダーム ヴァイエヒー
חַיָּה לְנֶפֶשׁ הָאָדָם יָהִי
生きるものと その人は なった

神である主は「その人」を形造りました。「その人」って誰でしょう。

ここが大切な一つ目のテーマです。

「その人」を、大地にあるちりで形造ったということです。

大地の中にある「ちり」で造り、「その人」の鼻に吹き込みました。

^{ハツイーム} ^{ニシュマツト}
חַיִּים נְשָׁמַת いのちの息をその鼻に吹き込んだ。すると

^{イエヒー}
「その人は יְהִי になった」のです。どのように？

^{ハツヤー} ^{ネフェエシユ}
הָיָה נְפֶשׁ 生きるたましい（直訳）となりました。

生きるものとして、その人は存在するようになりました。

ここには、5つの語彙が初出箇所として出てきます。

^{アーファール}
עָפָר ちり

^{ハツイーム} ^{ニシュマツト} ^{ヤーツアル}
חַיִּים נְשָׁמַת いのちの息 יָצַר 形造る

^{ナーファハ} ^{ペアツバーヴ}
נִפְחָה 吹き込む בְּאָפִיו 其の鼻に

キリストという鍵を持って一つ一つ味わっていきましょう。

アーファール
אֶפְרַיִם ちり (111回)

「 空しい存在 無価値な存在 卑しいものの 」

創世記 3 章 14、19 節 (2 回) 詩篇 103 章 14 節 ヨブ 22 章 24

アーファール
節 にも אֶפְרַיִם ちりが出てきます。

陶器師である「神である主」が、ちりを粘土にして形造ることで
最高の作品になります。 ちりだけでは作品にはなりません。

ちりは、神のことばを象徴する水によって、
最高の粘土に練り上げられて最高の作品に造られます。

「 ちり 」から最初の人アダムが造られました。

そして、野の獣や空の鳥をアダムのところに来てきて名前を付ける
ように命じます。そして、その中にふさわしい助け手がないと発
見させます。 ここで注意です。

野の獣や空の鳥は「 ちり 」ではなくて土から形造られます (創 2：
19)。 人は「 ちり 」から造られ、野の獣や空の鳥は土から形造
られています。 この違いがわかりますか。 野の獣や空の鳥の中に
は助け手がない、とはどのような意味なのでしょう。

助け手が見つからなかったのは、素材が違うからです。

人は「 ちり 」から造られ、鼻に息（霊）を吹き込まれます。

野の獣や空の鳥は土から造られますが、霊が吹き込まれないのです。

ヨブ 10 章 9 節

思い出してください。あなたは私を粘土 ^{ホームル} אֶמְרָה のように造られまし
た ^{アーサー} אֶשְׂפָּרָה。私を土のちり ^{アーファール} אֶפְרָרָה に戻そうとなさるのですか。

^{アーファール} אֶפְרָרָה は「 無価値な むなしいもの それだけでは何の意味もな
い 存在価値の無いもの 」なんです。

そこに戻そうとされるのですか、と尋ねています。

神様が陶器師として、ヨブを粘土として扱うことがわかります。

イザヤ書 64 章 8 節

「・・・【主】よ、あなたは私たちの父です。私たちは粘土 ^{ホームル} אֶמְרָה で、
あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの御手のわざです。」

父は、私たちの存在の源であり、あなたの御手のわざ、作品としています。「私たち」とは、イスラエルでしょ。

聖書は、イエシュアとともにイスラエルという鍵を持つことで、立ち上がって来ます。だから、

単なる人間の一般的な創造の物語ではないのです。

昨日の私の礼拝メッセージは「ナホム書」でした。

「ナホム書」のテーマは、イスラエルに対する態度によって神様が最終的なさばきをするということです。

神様の地上再臨は、復讐と報復のためでもあります、

それは、一般的な罪に対するものではなく、

イスラエルにどのような態度をしたかをさばくための地上再臨です。

だから、悪に対して神様が戦うという意味ではないのです。

イスラエルの視点を外してしまうと読み方が変わってしまうのです。

神である素晴らしい陶器師が選び出した「粘土」は、

小さな石やごみを取り除いて、何度も練り上げて最高の粘土にしま

す。そして、形にして、火で焼くことで陶器になります。

火で焼かずに、粘土だけでは崩れてしまい、かたちが保てません。

火で焼いてようやく陶器になります。これは大切なプロセスです。

火で焼くとは、試練を表します。

「 ちり 」は、特別に選ばれ、目に見える形にして、火という試練（苦しみ）を通して、神の作品として造られます。 では、

私たちは、試練を通して神様の作品として生まれていますか？

そうではありませんね。

この「 ちり 」にあてはまるのは「 イスラエル 」です。

「 私の目には あなたは高価で尊い（イザヤ 43：4） 」

と、イスラエルを ^{ヤーツアル}  形造った方が言われています。

ここを自分に当てはめて「 神様がどんなに私を愛してくださっているか、神様は愛だ。 」と解釈するクリスチャンがいると思います。

間違ってはいませんが、イスラエルがすっかり抜け落ちて教えている教会が少なからずあるようです。

「 私の目には あなたは高価で尊い 」とは、イスラエルに語られる神様のことばです。 私たちは、イスラエルに接ぎ木されて連動しているにすぎません。イスラエルへの神様のラブコールなのです。

「 私の目には あなたは高価で尊い ちり 」で造り、
最高の粘土にして練り上げて形にしたものを火で焼いて最高の陶器
にしたということです。 ですから、高価で尊いのです。

「 ちり 」は無価値で卑しいものです。高価ではありません。
イエシュアが生まれたベツレヘム（エフラテ）は、最も小さい名もな
いところです。そしてナザレ人イエシュアと呼ばれるのもそうです。
ナザレって何？ というような人々の記憶にも残らない、ナザレから
何か良い物が出ようかと言われるような場所です。

当時のエルサレムの中心である、最も宗教的な視点で見ると、
ナザレは、異邦人化した町の名前です。

そこから、イエシュアが躍り出てきます。

そして、イエシュアとともにつき従ったのは、無学な者たちです。

ただの漁師であった者が立ち上がって、「 御国の福音 」を語るよ
うになりました。

エルサレムの最も権威と力のある者たちにも分からない事柄を、
神様は、最も弱い者たちに託すのです。

イスラエルもちりから造られているのです。

もっとも無価値な、それだけでは何の意味もない、無価値な小さな者
卑しい者を粘土にして、形造って焼いて作品にしているのです。

それは、日本人でもなく、アメリカ人でもなく、イギリス人でもなく、
フランス人でもなく、「イスラエル」なのです。

このように考えると、「ちり」は、

人間の小ささ、弱さというよりも、

「イスラエルの民の表象」と言えます。

エジプトの大地から、イスラエルの民を連れ出して神ご自身の手で
形造り、いのちの息を吹き込んで生きる者とする

神の壮大なストーリーが隠されているのです。だから、

私たちが、イスラエルを軽く扱い無関心なのは大変ないのち取りに
なるわけです。イスラエルに表された神を知ることが、

異邦人である私たちにとっての救いになるわけです。

神の偉大なストーリーの中にも、

「主」ということばの中にも贖いの概念が含まれていました。

その「主」が、

イスラエルに向けてあらゆる概念を啓示しているのです。

申命記 7 章 7-9 節

- 7 【主】があなたがた（イスラエル）を慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。
- 8 しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隸の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖いだされたのである。
- 9 あなたは、あなたの神、【主】だけが神であることをよく知らなければならぬ。主は信頼すべき神であり、ご自分を愛し、ご自分の命令を守る者には恵みの契約を千代まで守られる。

モーセが第二世代に語って、カナンへの地へ入る準備をさせています。

ここから何がわかりますか？

イスラエルは、あらゆる民のうちで最も数が少なかったのです。

イエシュアも最も小さな町で生まれました。

そこから良いものが出るなんて誰も思わないナザレで住み、

神のことばを学び、偉い人から学んだのではなく、神との交わりを通してして神様の御計画に触れ、貧しい者、取るに足らない者たちを呼び寄せて弟子たちとして選びました。

その弟子たちを世界に解き放っていくわけです。

「 ちり 」のような存在を「小さな者たち」と聖書では言っています。 それは目に見える子どもを指しているのではなく、この世においては、最も小さな者であり、力のない者、数の少ない者を指しているのです。

聖書は、徹頭徹尾、イスラエルという基軸、その歴史を土台にして解釈しなければ、神様のみこころから外れてしまい、神様のご計画を描くことが出来ない、語れないクリスチャンとなってしまいます。

つまり「 御国の福音 」を語れないクリスチャンに成長してしまうわけです。 サタンは神様の御計画を語る者たちを恐れていますので、安心しているでしょうね。

「 神様は私たちのことを守ってください！！ 」と喜んでいる者をサタンは恐れません。

しかし、神を信頼する者、神の御計画を語るクリスチャンには、

自分の敗北を知られるので、いつの時代も恐れているわけです。

ヤーツアル
יצר 形造る (63 回)

陶器師が粘土で形造って作品にすることをイメージさせる動詞です。

ヤーツアル
יצר は、陶器師である「主」が、どのようにイスラエルを扱うかを知る上で極めて重要です。(エレミヤ書 18 : 1-12 19 : 1-2 11-12) 陶器師である神が一旦作った器を気に入らなければ打ち砕いて粉々にして、もう一度造る話が出てきます。

陶器師が気に入らなければ、壊してもう一度、最初から造ります。

それは使徒パウロに受け継がれ、キリスト者について語っています。

Ⅱコリント人への手紙 4 章 7 節

私たちは、この宝を土の器の中に入れて 있습니다。

「土の器」が陶器です。

「宝」とは、贖われた私たちの霊の中に住んでおられるいのち、復活されたキリストのいのちです。その「宝」を入れる土の器

の原型が、創世記 2 章 7 節に登場する「その人 ^{ハーアーダーム} אָדָם 」

一般的な人間ではなく「その人」です。

だから単なる人類を造られたという話ではないのです。

神の霊が入っている「人」です。実は、

創世記には、人類がどのように出来たのかという話は書かれていな

いのです。創世記 1 章にも、霊の入らない人はたくさんいます。

そして、霊の入っている人、神と繋がっている人は、イスラエルだけ
なのです。

2 章で、「神である主」という名前に贖いが含まれていること
を学びました。

贖いは、既存のものを造り変えることで、ここから神様が何かを伝え
ようとしているのです。

ナーファハ

נִפְחַח 吹き込む

「炭火を起こして燃え立たせる」

ルーアツハ

火は「息風 רוּחַ」、これを吹きつけることで勢いよく燃え
ます。溺れて仮死状態の者に息を吹き入れて生き返らせること
ができると同様に「その人」とは、神の「いのちの息」が

ハイヤー ネフェシユ
吹き込まれて、他の被造物とは異なる被造物 **הַיְהוָה שָׁפַח** となっ

たと書かれています。他の被造物とは異なる存在 **הַיְהוָה שָׁפַח**。

ハイヤー ネフェシユ
神のいのちの息が吹き込まれている **הַיְהוָה שָׁפַח** です。

ですから、聖書の死とは、神のいのちの息を喪失したか、あるいは機能不全に陥っていることを意味します。

もし神の「いのちの息」を喪失したなら、人は栄華の中にも、悟らなければ滅び失せる屠られる獣に等しいのです。(詩 49 : 20)

ハイヤー ネフェシユ
他の生き物となんら変わることはない **הַיְהוָה שָׁפַח** です。

ですから神様が「いのちの息」を吹き込んでくださることは、とても重要なのです。

神の息が吹き込まれるとき

十字架で死なれたイエシュアは、復活された週の初めの日の夕方弟子たちのところに現れます。

どのように現れましたか？

「平安があなたがたにあるように

アレーヘン シャローム
שְׁלוֹם עֲלֵיכֶם

「神様のご計画があなたがたに実現しますように」

という意味の挨拶をされました。

単なる「ごきげんよう」という話ではありません。

「聖霊を受けよ」と、息を吹きかけることが、聖霊を受ける

(ヨハネ 20 : 22) ということです。

その息を吹きかけると同時にイエシュアは「御国の福音」を彼ら

に 40 日間語られます。 3 年半イエシュアに従ったにも関わらず、

「御国の福音」を理解していませんでしたが、40 日の顕現で

何度も何度も息を吹きかけられて、その息を吸い込むことで、

「御国の福音」を完全に理解したのです。そして、内側が整え

られ、 50 日目にイエシュアが昇天して御座についたとき、

御座から吹いてくる物凄く強い風に権威を与えられて、彼らは

エルサレムの権力者の前で、イエシュアを証しするようになります。

その代表が、ステパノです。

「 息を吹きかけて ^{ナーファハ} אָנַחְתָּ = ^{エンフユサオー} ἐμφυσάω 」

新約聖書でもヨハネの福音書 20 章 22 節一回限りです。

創世記 2 章 7 節で最初に、神が人に「いのちの息」を吹き込まれた後、人が、天にある神の霊の流れのいのちに与ることと似ています。このいのちをイエシュアは与えて、神と人との本来の関係を回復してくださったのです。

そのために、御子は人として来られなければなりませんでした。

人として、最初の人が犯した問題をすべて、終わらせて、

三日目に「いのちを与える霊」としてよみがえり、

霊を回復するために、私たちの霊の中に内住されたのです。

そのための十字架の死であり、十字架にかかるために、人として来られたのです。この一連の出来事がすべて連動しています。

神が私たちのど真ん中に住もうために、

御子は、人と来なければならない必然性があったのですね。

神が人の内に住もう ^{ミシュカーン} מִשְׁכָּן 幕屋を実現されたのです。

ハッヤー ネフェシユ
生きるものとなった **חַיָּה נֶפֶשׁ**

息を吹きかけられることで、人は生きるもの **חַיָּה נֶפֶשׁ** になっ

たとあります。 生きるもの、生きるたましいを **חַיָּה נֶפֶשׁ**

といいます。 この表現は人だけではなく、生きるいのちのあるすべ
ての獣、鳥、這うものにも使われています。(創 1 : 30)

創世記 1 章 30 節を新改訳第 2 版は「 いのちの息 」と訳しまし

たが、これでは 2 章 7 節の **חַיִּים נְשֻׁמָּת** (神様の霊) と

変わらないために新改訳 2017 では

「 生きるいのちのあるもの 」と改訳されました。

「生きるいのちのあるもの」と「生きるもの」は **חַיָּה נֶפֶשׁ**

ですが、

2 章にある「 その人 」は単なる「生きるもの」ではなく

神の特別な霊が吹き込まれているのです。

どのように吹き込んだのかは、その後に出てきます。

ヘアッパ-ヴ

בְּאַפִּיו 彼の鼻孔（直訳）

「いのちの息」を吹き込まれた時、神が人の顔と向き合っ
て息を吹き込んでいます。それが2章後半で展開されています。

人が一人でいるのはよくない、「その人」に向かい合うものとし

て ^{ケネグド-}כְּנִגְדּוֹ ^{エ-ゼル}עֵזֶר 助け手とのかかわりが型になっています。

神そのものが向かい合う関係ですから、三である神そのものが

実は向かい合っていることが原型です。だから、

神と人が向かい合っているように造られました。

向かい合うかたちとして「鼻」で表しています。

鼻は、顔を代表していて、向かい合うかたちを表します。

「その人」が、自分の ^{ケネグド-}כְּנִגְדּוֹ ^{エ-ゼル}עֵזֶר 助け手と向かい合う関

係です。それが、アダムから造られる女性です。

それは、生物学的な女性ではなく、イスラエルであり教会なのです。

「その人」が最初のアダムでもあり、また第二のアダムです。

最後の人イエシュアの助け手は、イスラエルであり教会なのです。

このように重層的なことが、2章には、たくさん込められています。

ヘブル語の顔を意味する語彙に^{アツパイク}פָּנַי、と^{パーニーム}פָּנֶיךָがあります。

いずれも双数形です。

目、唇、耳のような対になる名詞を双数名詞といいます。

^{アツパイク}פָּנַיは、^{アフ}אָזְנוֹから由来していて、鼻孔を意味します。

顔の際立った部分の場所にありますね。

顔全体を示す名所として使われています。

創世記 19 章 1 節

その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところ
に座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、

^{アフ}顔אָזְנוֹを地に付けて伏し拝んだ。

顔と訳されているところが鼻のことです。

「新しいエルサレム」で、神様に仕える「 神のしもべたち(神の民) 」

は、「 御顔を仰ぎ見る 」と記されていましたね。(黙 22 : 4)

私たちにいのちの息を吹き込んでくださり、神の御顔を見る事が出来るのは、神と人がともに住む家の究極的な祝福であり、喜びを表します。御顔を仰ぎ見る表現が、聖書の中に3回しか登場しません（詩11:7,17:15、黙22:4）が、神様と人が親しい関わりを持つ究極的な表現になっています。

人としての容器

神が「ちり」で粘土を造り、粘土を焼いて陶器にすることから容器としての人とする概念が出てきます。

ローマ人への手紙9章21、23節

(9章～11章はイスラエルの章)

21 陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。

23 しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられたあわれみの器にたいして、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。

聖書は、直接的にはイスラエルに、そして、
イスラエルに連動する私たちにも、神の器であると述べています。
器は容器であり、道具や用具とは異なります。
器は何かをするために使われるのではなく、
何かを入れるために用いられるのです。
私たちは神を入れるように運命づけられている容器です。
私たちの中に、神様のすべての知識や知恵の多くを入れるように
造られているわけです。
それが神の容器として造るということです。

ハハニ-ナー ケレー
כְּלִי-הַתְּנִינָה
「 あわれみの器 」

神は私たちが、神の栄光のための「 あわれみの器 」になることを
願っておられます。

神が、どんなにあわれみ深いものか。

ハーナン
תְּנִינָה
あわれむ 🖐️ どんな犠牲を払っても取り計らう神のあわれ
みを表すことばです。

神の意図は、私たちを神ご自身で満たすことなのです。

箴言 20 章 27 節

人間の息は【主】のともしび、腹の底まで探り出す

人間に与えられる神の息は、人間を照らすともしびです。

そのともしびは、腹の底まで探り出すようなかわりを示します。

人間の息を ^{アーダーム} אָדָם ^{ニシュマツト} נְשִׁמָּתָא で表していて、それは、

「人間の霊」であり、「主のともしび ^{アドナイ} יְהוָה ^{ネール} נֵר 」です。

光を放つために油を入れた容器であり、ともしびです。

同様に、私たちの内側には、人間の霊という容器があり、

神の霊という油が入ってともしびとなるのです。

事実、復活されたイエシュアは、「いのちを与える霊」となって

私たちの霊の中に内住しておられます。

私たちはこの宝を土の中に入れていますが、は同様の表現です。

私たちの霊を回復して、神様がともに住んでくださる、

これが復活の出来事です。

私たちのたましいを復活させたのではなく、

霊を復活させて、イエシュアがとどまるのです。

そこから私たちのたましいを造り変え、最終的に霊のからだに造り
変えられます。

教会は、携挙のとき、イスラエルは、千年王国が終わった時です。

今回のまとめ

神である主が人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き入れたことは
本当に重要です。

これで、地と天が、神と人が繋がりました。

地と天をつなぐ役目を担うのが、「人の霊」とその中に住まう「聖霊」

です。 その予表が、6節：「湧き上がる^{アーラー}  」です。

湧き上がっている、待っている、そこに、人間の息が人の中に入って

聖霊と結びついて、地と天が繋がる話でした。 そして、

人は、神の霊の神の器、容器として^{ヤーツアル}  形造られました。

しかも、神の栄光のための「あわれみの器」(ロマ9：23)です。

神様のあわれみがなければ、実現も、完成もありません。

隅々まで、神様のあわれみによる御計画は進み、

成就するストーリーが聖書なのだと思います。

ここには人間的なものは何も入れません。

神主導が踏襲されている書だということなのですね。

2023. 8. 7 アシュレークラス月曜日 創世記 2 章 No.2

空知太栄光キリスト教会 銘形秀則

